

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4393000106		
法人名	社会福祉法人光栄会		
事業所名	グループホーム りんごの里		
所在地	熊本県葦北郡津奈木町小津奈木2120-62		
自己評価作成日	令和 6年 1月 22日	評価結果市町村報告日	令和 6年 3月 14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「明るく、楽しく、元気よく」の理念のもとにお一人おひとりが自分のペースで安心して生活を送り、持っている能力を維持・発揮できるよう日々努めています。認知症の症状や体調の変化を受け入れ、専門医や主治医にも相談しながら、試行錯誤を重ね、入居者様と向き合い、個々にあった支援に取り組んでいます。コロナウイルス感染症の5類への移行に伴い、対面での面会が可能となり、ご家族との関係性を維持していただくことができています。感染が少しずつ収まることで、外出の機会が増える暮らしが実現できるよう取り組んでいきたいと思っております。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 九州評価機構
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号
訪問調査日	令和 6年 2月 16日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設から5年、入居者それぞれ年齢相応の衰えも見られるようですが、日々穏やかで落ち着いた中に「明るく、楽しく、元気よく」の理念のもと、第二の我が家としての生活が送られています。入居者の体調は気持ちにも連動することから、入居者の「いつも」を知ることが変化への気付きに繋がります。そのためには職員の「見守り」が大事とされています。支援の中での気付きや悩み、問題事項が見られた際には直ちに研修を行い、次に繋がる検討・工夫がなされています。開設間もなくのコロナ禍で制約もあったであろう中、入居者の以前の生活に耳を傾け、地域行事にまつわる料理の提供や地域の特産物の提供等、「生活」を大切にされた支援がなされている様子がうかがえました。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	フロア内に理念を掲示し、月1回のミーティングの始まりに復唱し、共有に取り組んでいる。年間目標は理念を踏まえた項目を掲げ、達成できるよう努め評価を行っている。	理念は会議の機会に唱和し職員間の共有を行っている。今年度は理念に基づいた具体的なケアについて検討を行っているところである。家族へのおたよりでも理念に触れ、啓発と共有を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍ではあるが、感染状況を確認しながら保育園やハモニカ演奏、踊りなどの慰問を屋外で行うことなどができた。	感染症対策を行いながら、屋外等も使用し、近隣の保育園児やボランティアの方々との交流・訪問受入れ等を続けている。その際には入居者も外へ出て交流の機会となっている。地域のコンビニエンスストアによる移動販売車の来訪も見られる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍ではあるが、認知症カフェの活動もできた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の開催であるが、コロナ禍のため、昨年に引き続き、書面で報告し、意見を伺っている。委員の方々からは、入居者様が楽しく過ごせるように職員が工夫していることへの評価やコロナ禍での職員の対応への励ましの言葉を頂いている。	コロナ禍のため書面による報告も続いたが、感染症対策を行いながら対面での開催を再開した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	介護保険や福祉の関連での連携会議等は、開催されなかったが、必要な際の電話等での連絡は行っている。	運営推進会議には町・社協・地域包括支援センターからの参加があり、事業所の取組みを伝えている。町主催の認知症カフェ等への協力も行った。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3か月に1回の委員会を通して、身体拘束の実態を確認している。2回/年の施設内研修で繰り返し学び、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	法人で行う委員会に事業所職員が参加し、内容は事業所ミーティングで共有している。委員会では実態報告や虐待の芽チェックシートの実施・集計結果を踏まえた研修等を行っており、基本に立ち返り再考している。自立度が高い入居者については事故防止の対策も考慮しながら身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内研修にて不適切ケアについて繰り返し学び、年1回、虐待の芽チェックシートを行うことで虐待への認識を深めている。今後はそれらの結果を踏まえて、定期的に振り返る機会を作る必要があると考える。		

グループホーム りんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	検討の必要性があった場合は、社協の窓口へ相談できるよう、関係性を構築している。また、施設内の生活相談員に相談できる環境を整えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用契約時には丁寧に説明し、十分な理解・納得をして頂くよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1回満足度調査のアンケートを実施している。コロナ禍での面会制限により、ケアプラン更新時や電話連絡時に要望や意見等を確認している。また、毎月、報告書を送付し、全体の様子や一人一人の状況を伝えている。	年1回の家族アンケート実施を継続している。コロナ禍で面会制限を余儀なくされたが、面会時の声掛けや電話連絡、報告書等で入居者の状況を伝え、意見・要望を確認している。現在、担当者会議への家族参加について再開を検討しているところである。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者による年に1回の面談を実施し、様々な意見や要望を聞く機会も設けている。月に1回のリーダー会議や運営会議を通じて職員の意見や提案を聞く機会を設けている。	職員は普段からリーダーや管理者へ意見や提案を述べる事ができる体制であり、必要時にはリーダー会議や運営会議にて法人への報告・検討がなされる。職員それぞれに対し管理者より年1回面談を行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	現状の把握は管理者を通じて行っており、給与水準の見直しを図っている。コロナ禍で研修の機会は少なくなったが、Wi-Fi環境を整備し、オンラインで参加可能な研修へは積極的な参加を促した。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の必要とする研修はできるだけ全員が受講できるように時間の設定に配慮した。また、オンライン配信研修の活用に加え、シミュレーション研修の実施やより具体的に実践に則した研修報告書の書き方にも工夫を行った。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍ではあるが、地域密着部会へは可能な限り出席し、防災やそれぞれの困りごとに対する意見交換ができた。また、ケアマネを同行し、ケアマネ同士の情報交換を行う機会もあった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人、ご家族から生活歴や趣味、嗜好等の情報を得て、不安なことやわからないことがないように説明を行った上で、ご本人と関りを多く持ち、安心して生活できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時にご家族の要望や不安なことに関して話せる機会を作り、その後も良好な関係を保てるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	アセスメント時に本人が望まれている生活を理解し、必要な支援を見極め、ニーズに合った対応ができるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩として尊敬の気持ちを持ち、得意なこと、できること、できないことを把握し、その能力を発揮できるよう支援しているが、見直しの必要性も感じている。昔からある行事や知恵等教えてもらうなど、いい関係性ができるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月、状況報告書を送付し、コロナ禍の面会制限によるご家族の心配や不安を軽減できるよう努めている。5類移行後は、対面での面会を実施。本人に必要と感じた時は、家族様へ面会に来ていただくよう相談することもある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で外部との交流は難しいが、施設内の交流は継続している。馴染みの方とは電話や手紙等で関係を保てるよう支援している。また、個人的には近所の方が面会に来られることもあった。	現状、外出等による外部との交流は難しい状況であるが、病院受診を機会に家族同行で自宅訪問をされたり、知人の面会を受入れる等、個別支援を行っている。花が好きな方には花植えを見て頂く等、好きなこと・興味があることへの支援も行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様同士の関係を観察し、必要時には職員が間に入り会話をつないだり、不快な思いをしないよう、気配り・目配りをして対応している。		

グループホーム りんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	施設内の特別養護老人ホームへ移行された方には、りんごの里での行事と一緒に参加して頂いたり、気軽に行き来してもらうことで、関係性を保つようしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	これまでの生活歴や習慣を踏まえ、日常生活での会話や表情、行動から心情を察し、本人の思いや意向の把握に努めている。	日々の職員の会話や寄り添いから意向を把握している。買い物の希望が聞かれた際には職員同行で出向く。月2回の移動販売では自ら商品を選ぶ姿も見られる。自立度の高い入居者もおられことでヒヤリハット事例もあるが、都度対応策を検討・共有することで、思いを遮ることなく入居者の思いを大切にしたケアを行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの際、生活歴や環境について把握し、サービスに活かせるよう努めている。必要時は家族に連絡し、確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の会話や行動、表情、バイタルサインなどを参考にして心身機能の把握に努めている。状態の変化はケース記録や申し送りノートに記載、情報を共有している。いつもと違うと感じたら、申し送りで伝えるようしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングの情報や毎月のミーティング時に得られた課題や改善点等をケアプランに反映させている。家族への相談や報告を行い、現状に即したプラン作成に努めている。1月より担当者会議も対面で再開。	職員会議での職員の意見やモニタリング情報等により現状に即した介護計画としている。コロナ禍が続き家族へは電話等にて状況報告を行っていたため、担当者会議への家族参加を再開し始めたところである。	コロナ禍での面会制限もあり、家族への連絡等は電話が中心であった様子が聞かれました。入居者の日々の生活の様子を共有して頂くためにも、家族参加での担当者会議の再開が実現することに期待します。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や変化、気づきを記録し、情報を共有できるよう努めており、申し送りノートも活用し、今後のケアに繋げられるよう努めている。ヒヤリハットがあった場合は、すぐに対策を検討し事故防止に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎日の生活の中で出た要望を取り入れながら入居者様の思いに応えられるよう努めている。 ご家族が困難な場合には受診同行も行っている。		

グループホーム りんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	5類になっても周囲の感染状況により、地域との関わりを持つこと、外出することなどが難しい状況が続いており、実践できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力病院による月に1回の訪問診療、訪問歯科を受け体調管理の面で連携を図っている。専門医の受診支援同行も行い、必要時は家族にも同行してもらった。ご家族の希望により入居前のかかりつけ医を継続している方には家族の負担を減らすため往診に切り替え、家族も安心された。	入居以前からのかかりつけ医の継続した受診を支援しており、現状は殆どの入居者が協力医による往診である。歯科医からの往診、歯科衛生士の来訪もある。看護師資格を持つ職員も入職したことから、入居者状況もすぐに相談ができ、医療機関との連携もより充実したものとなった。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設内の看護師へ相談できる環境を整えている。また、昨年入職した看護職員も含めて相談しながら充実した健康管理ができるよう努めていく。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力病院との年2回の連携会議の開催は、コロナ禍のため、実施できていない状況であるが、電話等で必要に応じて情報交換や相談を行い関係性の維持に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時リビングウィルの確認を行っている。重度化した場合は主治医も含めて家族様とも話し合い、法人内の特別養護老人ホームへの案内もしている。	入居時に重度化や終末期に向けた方針と事業所の対応を説明しており、実際にその時期を迎える際には家族との話し合いを重ね、医療機関等と連携をとり支援を行う。現状は医療が必要となった際の入院、法人内の特別養護老人ホームへの住み替えが多い。ユニットリーダー会議で看取りについてのフローチャート及びマニュアル確認等も行った。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡体制やマニュアルを作成し備えている。施設内研修にて緊急時の対応についても学んでいる。今年度から看護職員に緊急時対応ファイルの更新を行ってもらったこととした。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の消防訓練を実施している(日中・夜間想定、火災・地震災害想定)。ポータブル発電機の試運転など定期的に行い、運転方法を共有している。	避難訓練時も地震が想定した火災等、具体的な想定で行っている。居室入り口に手押し車や車椅子のイラストを貼り、入居者の歩行状態を示している。訓練後は講評により反省を行い次回に活かしている。防災委員会メンバーが発電機の試運転も行った。	現在は隣接するデイサービスと合同での訓練が実施されています。有事の際は事業所独自での避難も必要な場合が想定されますので、取組みの工夫にも期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの人格を尊重した言葉かけや対応、人生の先輩としての尊敬の心を持った対応を心がけているがプライバシー保護や言葉遣い等、不十分なところがある。研修時や年間の反省で挙がっているので定期的に意識できるよう検討が必要。	日々のケアの中での言葉遣いや対応等、配慮しながら行っているが、気づきが見られた際にはミーティングを行いながら対応している。プライバシー保護については動画等も用いて研修を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一人ひとりが思いや希望を言えるような環境作りを行い、自己決定が出来るよう努めている。うまく伝えられない方には、表情や会話などから読み取るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務優先にならないよう伝えているが、不十分なところがある。起床時間は本人のペースに合わせている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問理美容、馴染みの美容室の利用を継続している。好みに合わせた身だしなみができるよう、ご家族に協力してもらいながら支援している。ほとんどの方が自分で服を選んで着られている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	自分たちで育てた野菜や季節の食材を使った調理やおやつ作りを行っている。運動会の日はお弁当形式の昼食、地域の祭りの日には、その当時に思い出しながら味わっていただけるようなメニューにしている。また、地域の特産物を味わう会も行った。	栄養士による献立で法人厨房手作りの食事を提供しており、栄養士との情報共有もできる。3ヶ月1回給食会議も行っている。地域のお祭りの日には馴染みの献立にしたり、折り紙でお守りを添えたりと季節感も大切にしている。クリスマスケーキやおはぎ、季節の保存食作り等、入居者手作りの機会も見られる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取は記録し、管理しているが、必要に応じて医師や栄養士に相談している。摂取量が少ない方には嗜好品や代替品を提供するなど状態に応じて形態を変える工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ほとんどの方が食事後自ら歯磨きを行っているが、声掛け、見守り介助が必要な方には支援を行っている介入が難しい方もいるため訪問歯科の利用および指導は、助かっている。		

グループホーム りんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立されている方には、トイレでの排泄が継続できるよう支援している。介助が必要になった方でもできるところはおこなってもらい、できないところのみを介助している。パットの種類の工夫や夜間のポータブルトイレの使用、トイレへの誘導の声掛けは個々に合わせて行っている。	できるだけトイレでの排泄が継続できるよう支援を行っている。入居者の状況によってパットやオムツ、ポータブルトイレの使用等があるが、それぞれに合わせ、またパット等の使用量にも配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日チェックを行い、水分を多めに摂ってもらうよう、また適度な運動も取り入れるよう努めている。状況に応じて医師に相談し、便秘薬を調整しながら、対応を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回午後に行っている。体調によって曜日や時間をずらすなど柔軟に対応している。残存機能の維持ができるよう努めている。個々の状態に合わせて、リフト浴も使用している。	週2回を基本に、できるだけ見守り付き添いを基本とした支援を行っている。開設後リフト浴も備えられたことで、介護度が高くなっても事業所で浴槽を利用できるようになった。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	これまでの生活習慣や状態に合わせて、支援をおこない、体に負担の無いよう、日中も休息してもらうよう静養時間を設けている。また、室内の温度や湿度に注意するなど環境にも配慮している。睡眠がとれない方には、湯たんぽを使用し、睡眠の確保に努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情書をファイルし、その都度確認できるようにしている。誤薬などが無いよう服薬時の確認を丁寧に行っている。処方の変更になった場合、家族に報告、記録して状態観察を行ない、訪問診療の時に報告している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	趣味や得意なことを継続できるよう支援している。役割としての家事活動や行事など楽しみを持って生活できるよう取り入れ、継続している。お花や野菜をプランターで育て、収穫したものを調理に使用するなどしている。嗜好品は移動販売を利用したり、職員が依頼を受けて購入する。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍が続き、外出支援はほとんど実践できなかったが花見ドライブは継続している。また、屋外でおやつを食べたり、周辺の散歩等行った。	コロナ禍により気軽な外出支援は難しい状況であったが、花見ドライブは継続できた。季節毎の花植えや焼き芋作り、移動販売車での買い物や敷地内の散歩等、外気を感じる機会を作っている。	



グループホーム りんごの里

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍で外出しての機会は少ないが、セブンの移動販売を利用してもらっている。お小遣いは、自己管理している方、定期的に一定額を渡している方、職員が管理支援している方と個々に合わせ対応している。買い物物の依頼には職員が対応している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時には自由に電話ができるよう支援している。手紙の投函の希望があった場合は職員が対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一緒に作った季節を感じられる製作物を飾ったり、季節の花を飾ったりしている。また、室温・湿度にも配慮している。室内は自由に行き来できるよう安全な動線を確認し、快適に過ごせるよう努めている。	木造で穏やかな雰囲気のリビングには入居者が集う姿があり、居室にも自由に行き来ができる。壁には季節のタペストリー等が飾られている。自由に過ごすことができる時間には入居者は思い思い好きな場所に座り、外を眺めたりのんびり過ごす姿もある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者様同士の関係性を考慮して席の配置をしている。入居者によっては、場所を移動して外を眺めたり、居室で会話され、楽しむ方もおられる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に馴染みの物を持ち込んで頂いたり、好きなように飾ってもらったり居心地よく生活できる空間になるよう支援している。また、ベッドや家具は本人の行動などを把握し、安全を考慮して配置している。最近、面会の時に撮影した家族との写真を飾ってもらうようにしている。	入居時には使い慣れた生活用品の持ち込みを依頼している。暖簾が掛けられた居室もあり、入り口には額入りの絵が飾られている。入居者によってベッド・布団等、これまでの生活歴と安全への配慮から様々である。中には好きなキャラクターに囲まれた居室もあり、入居者の生活や好みを感じることができる設えである。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全に移動ができるよう動線を確認し、行動をみながら柔軟に対応し、環境整備を行っている。		

## 2 目 標 達 成 計 画

事業所名：グループホームりんごの里

作成日 令和 6年 3月 14日

### 【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目 標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	26	コロナ禍で担当者会議が行えず、報告は電話が中心となっているが、家族参加の会議実現に期待する。	担当者会議の対面での再開を感染予防しながら行っていく。	コロナ等感染症の状況を確認しながら、換気や距離を取るなど安全に対面での会議ができるよう工夫し、できる限り対面での面談を目指す。	1年
2	35	事業所独自の避難も必要な場合も想定されるため取り組みの工夫に期待する。	施設全体とは別に独自の防災対策の意識も高め、有事の時に備える。	作成したBCPの内容を職員に周知し、緊急時の物品の確認を行うなど準備を進める。	6か月
3					
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。